辻村みちよをめぐる人々

辻村が研究の道に進んだ当時，日本においては女性の社会的地位も権利も制限されていた。そのような時代にあっても，自然科学を学びたいという辻村の熱意とともに，彼女が良き師に恵まれていたことは後の業績に多大の影響を与えた。

優れた指導者たち

近藤金助 博士：北大時代，学生の実験を指導中，熱心のあまりLiebig冷却管を握りつぶしたとのエピソードが伝えられている。真理探究にはいささかの矛盾や曖昧さをも許さない厳正さと同時に，深い配慮と温情をもって教育にあたられた先生であった。辻村は温かい指導を受けていたが，家庭環境を考慮され東京で研究を続けられるよう配慮した。

近藤先生は後に京都帝国大学に転任，栄養学の分野で多くの指導者を育成した。

鈴木梅太郎 博士：理化学研究所時代，指導を受けた鈴木博士は，研究結果を英文で報告することをすすめた。その指導により，1929年以来，辻村は英文理化学研究所彙報(Scientific papers of the Institute of Physical and Chemical Research)に毎年報告を続けた。これは辻村を単なる助手としてみなさず，将来独立の研究者として育つべき人物とみなし，研究成果を世界の学会に問わしめたものであった。後に鈴木研究室に女性研究員が増加したのは，このような指導原理によるものであろう。

辻村に対する世界的学者の評価

フロイデンベルク(Freudenberg Karl)は，ドイツの有名な有機化学者で，1910年ベルリン大学のE.Fischerのもとで学位を得て助手となり，1914年Kiel大学講師，1920年Munchen大学講師，1921年Freiburg大学員外教授，1922年Karlsruhe工科大学教授および化学教室主任，1926～1956年はHeidelburg大学教授などを歴任した。

主な業績としてタンニン類およびカテキン類について，立体化学，炭水化物(特にセルロース，デンプン及びシャルジンガーデキストリン，血液型に関係ある諸物質)およびオキシシンナミルアルコール誘導体およびリグニンについての研究がある。1931年アメリカの客員講師となり，Wisconsin大学，およびJohns Hopkins大学でインシュリン，光学活性体と立体構造，セルロースおよびデンプンに関する研究について講義した。1938年よりHeidelberg大学付属木材および多糖類化学研究所長となった。

1958年4月には来日して東大などで講義した。この時期に東大より，Freudenberg博士が辻村に是非お会いしたいと言われているとの連絡があり，辻村は山西を伴い東大を訪れた。Freudenberg博士は辻村の業績を高く評価し，礼賛した。

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編集・発行

研究協力者達

1949(昭和24)年東京女子高等師範学校からお茶の水女子大学となり，食物学科の研究室が創設された時，辻村は食品化学の教授に任命された。梅本(旧姓田部井)菊子は1950(昭和25)年から研究生となった。辻村は「体に必要なのは海藻である」と考え，海藻を採取し標本を作る計画を立て，梅本と海藻の豊かな北海道に研究旅行した。北海道には辻村が若い頃学んだ北大があり，久し振りに母校を訪ねたいという気持ちもあったように思われる。辻村の還暦の年であった。海藻の採取は忍路(日本海側)と室蘭(太平洋側)で行った。両方とも北大の施設があったのでここに宿泊し，北大の研究室の人々の協力を得た。

1951(昭和26)年秋，当時食品化学の助教授として北大より赴任した山西は緑茶の風味成分として，香りの研究をするようにすすめられ，以来，お茶の水女子大学食品化学研究室は茶の食品化学研究を発展させている。また，お茶の水女子大学定年後，実践女子大学教授になった後も，辻村は茶その他の植物のタンニンの研究を同大学の研究者たちに指導し，この分野の研究を発展させた。

参考文献

（1）「フロイデンベルク」『化学大辞典(８)』 83～84頁　共立出版
（2）「女性農学博士第一号辻村みちよ」『さいたま女性の歩み 上巻―目覚める女たち』第３章 219～220頁
（3）「今日を築いた化学のフロンティア　日本の女性化学者たち〈2〉緑茶の研究で日本最初の女性農学博士となった辻村みちよ博士」 山下愛子　MOL　昭和43年1月号　91～96頁

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター編集・発行